

戦争と性暴力の比較史へ向けて

—強姦、売買春から恋愛まで—

佐藤文香（一橋大学、社会学）

「兵士とセックス—普遍性と特殊性」

姫岡とし子（東京大学、ドイツ・ジェンダー史）

「独ソ戦下ドイツ兵の性と人種主義、そしてその記憶」

平井和子（一橋大学特任講師、日本近現代女性史）

「占領軍「慰安所」—構造的暴力の下での「出会い」

茶園敏美（京都大学研究員、占領地のジェンダー／セクシュアリティ研究、比較女性史）

「占領地におけるパンパンの作られかた・語られかたと性暴力」

西川祐子（京都文教大学客員研究員、文学、ジェンダー文化論）

「被占領空間京都の「進駐軍」／「街娼」／「住民」

コーディネーター：上野千鶴子（立命館大学、社会学）

参考図書：

メアリー・ルイズ・ロバーツ著、佐藤文香監訳

『兵士とセックス—第二次世界大戦下のフランスで米兵は何をしたのか』（2015年、明石書店）

レギーナ・ミュールホイザー著、姫岡とし子監訳

『戦場の性—独ソ戦下のドイツ兵と女性たち』（2015年、岩波書店）

日時：2016年3月12日(土)13:00—17:30

場所：立命館大学衣笠キャンパス 創思館1階カンファレンスルーム

主催：立命館大学国際言語文化研究所ジェンダー研究会

事前登録不要・参加無料（問い合わせ先：075-465-8164）

占領地における兵士の性に関する2冊の意欲的な労作がたてつづけに出版された。その刊行を記念して、監訳者のおふたりを迎え、日本の占領期の性の研究者と共に、比較史研究への視座を拓くシンポジウムを開催したい。

占領地で兵士は必ずセックスした。恋愛、売買春、強姦…。それは偶然の随伴物ではなく、不可避の支配-被支配構造の一部だった。ドイツの、フランスの体験は、日本軍「慰安婦」と、そして占領軍「慰安婦」と、どこが同じでどこが違っていたのか？

占領地でも同盟国と敵国では、兵士の性暴力はどのように異なっていたのか？ また構造的な性暴力のなかにある自発性から強制までの連続性をどうとらえればよいのか。抑圧的な状況を生き延びる女性のエイジェンシーは？ このシンポジウムは「戦争と性暴力の比較史」へ向けて、一步をすすめるための画期的な試みとなるだろう。

登壇者プロフィール

佐藤文香

社会学、軍事・戦争とジェンダーの社会学。著書に自衛隊の女性をテーマとした『軍事組織とジェンダー』（慶応義塾大学出版会）。『兵士とセックス』の他に、「軍事化とジェンダー」研究者として国際的に著名なシンシア・エンロー著作の翻訳『策略』（上野千鶴子監訳、佐藤文香訳、岩波書店）がある。

姫岡とし子

東京大学大学院人文社会系研究科教授。ドイツ近現代史・ジェンダー史専攻。著書に『災害・環境から戦争を読む』（共著、山川出版社）『歴史を読み替える—ジェンダー史から見た世界史』（共編、大月書店）、『ヨーロッパの家族史』（山川出版社）、『ジェンダー化する社会—労働とアイデンティティの日独比較史』（岩波書店）がある。

平井和子

日本近現代女性史、とりわけ占領期をテーマとする歴史研究者。著書に『日本占領とジェンダー 米軍・売買春と日本女性たち』（有志舎）。

茶園敏美

比較女性史、占領期のジェンダー/セクシュアリティと性暴力をテーマとする。著書に『パンパンとは誰なのか？ キャッチという性暴力とGIとの親密性』（インパクト出版会）。

西川祐子

フランス、日本近代文学と女性史研究。論文に「古都の占領」正続（『アリーナ』10号、15号）、著書に『借家と持ち家の文学史 「私」のうつわの物語』（三省堂）、『近代国家と家族モデル』（吉川弘文館）、『日記をつづるということ—国民教育装置とその逸脱』（吉川弘文館）他。

上野千鶴子

ジェンダー&セクシュアリティ研究のパイオニア。「慰安婦」問題にも関わる。著書に『ナショナリズムとジェンダー 新版』（岩波現代文庫）、『生き延びるための思想』（岩波現代文庫）他。